

トウカイティオーが
トップランキングの65%⁺

菊花賞“一冠”的
ビワハヤヒデは64%⁺

THE
BEST
OF

第38回有馬記念



Y. Muragishi

〈ハンデキャッパー〉

●栗東トレーニング・センター

古橋明、西田研、山田隆雄、尾関道春

●美浦トレーニング・センター

朝日真道、今泉俊彦、小林善一郎、井上真

●本部

甲佐勇

1993年のフリーハンデは、
本部、美浦、栗東の9人のハンデキャッパーが
白熱した議論を展開した末、
4歳、5歳以上、短距離、3歳の4部門が
別表のように決定した。

'93年度フリーハンデ決定 HANDICAP

まずははじめに競馬の国際化にともない、今後のフリー・ハンデについて議論がなされた。

現在、欧米の間では、英、仏、愛、独、伊、シヨナル・クラシフィケーション＝国際格付けに、北米の馬も加え、欧米統一のフリー・ハンデとして発表する計画が進められている。これは、ブリーダーズ・シリーズの創設によって、欧米のチャンピオン級の馬が競う機会が多くなったことにより、欧米の馬を相対的に評価する必要に迫られたからである。欧米統一フリー・ハンデは生産者、馬主、調教師、セリ会社、そしてファンにとって、特定の馬の国際的な位置付けを知る道標となる。

日本も92年にジャパンCが国際GIに格付けされ、さらに93年に安田記念、94年に京王杯スプリングCとスプリングCが国際レースになつたことで、今後は日本の馬が国際的にみてどの程度の格付けになるかを考慮したフリー・ハンデを決定しなければならないだろう。

そのためには欧洲に合わせた基準づくりをしていく必要がある。92年の欧洲フリー・ハンデのトップ・レイティングはサンジョヴィーノの135で、キロ換算すると61キロになる。いっぽう、日本のトップはトウカイティオーの65キロだ。これだとトウカイティオーナーの65キロがサンジョヴィーノのほうが、サンジョヴィーノのランクになつてしまふ。どうひいき目にもトウカイティオーナーがサンジョヴィーノより4キロも上などはとても考えられない。

欧洲フリー・ハンデのように細かく距離別に格付けすることも必要であり、国際化を進めしていく上で、欧米の基準に照らした形のフリー・ハンデも作成しなければならない、といつた見解が出席者の一致した考え方だった。

The Experimental FREE HANDICAP For 3-Year Olds of 1993

4歳



H. Matsuzak.

ダービー馬を抑えて ビワハヤヒデがトップ・ランク

93年の牡馬クラシック路線は、ナリタタイシン、ウイニングチケット、ビワハヤヒデの3強の争いに終始した。ウイニングチケ

ットの135で、キロ換算すると61キロになる。いっぽう、日本のトップはトウカイティオーの65キロだ。これだとトウカイティオーナーの65キロがサンジョヴィーノのランクになつてしまふ。どうひいき目にもトウカイティオーナーがサンジョヴィーノより4キロも上などはとても考えられない。

欧洲フリー・ハンデのように細かく距離別に格付けすることも必要であり、国際化を進めていく上で、欧米の基準に照らした形のフリー・ハンデも作成しなければならない、といつた見解が出席者の一致した考え方だった。

て馬体および精神面の著しい成長がみられ、菊花賞での他馬をまつたく問題にしない勝ちつぶりと、有馬記念2着が大きく評価された。

これまで、三冠の勝ち馬が全て異なればダービー馬の評価が高いことが例例であつたが、ウイニングチケットは精神的な弱さがでて大敗した有馬記念がマイナス材料となつた。さて、ビワハヤヒデのハンデを64キロか65キロかで意見は分かれた。

「65キロというのは最近では無敗で二冠馬になつたトウカイティオーやミホノブルボンに与えられている。それよりも一キロ下が妥当ではないか」という64キロ派。

また、牝馬も含めた5大競走の勝ち馬が新種牡馬の産駒と持込馬(ビワハヤヒデ)で占められたのも特筆すべきことである。

三強の序列だが、ビワハヤヒデがトップハ

フリー・ハンデとは

通常のレースのハンデキャップは、出走馬の実績、調子などさまざまな観点から負担重量を決定し、出走馬の“実力”を均等にしてレースを争わせようとするものであるが、フリー・ハンデは、その年度の競走馬の格付けをするものである。この格付けとは、単にその年度の各馬の実力比較にとどまらず、歴年の名馬の実力比較ともなる。ヨーロッパでは長いフリー・ハンデの歴史があり、年齢別のハンデだけでなく、距離別の全ヨーロッパのハンデもつくられている。これは生産界への指標ともなるもので、重要な意義をもっている。

The 1993 Experimental FREE

したい。そういう意味でオグリキヤップの年と似るのではないか。オグリキヤップは有馬記念を勝っているが、天皇賞とジャパンCで古馬の一線級と戦って良績を残したということも評価して65キロだった。ビワハヤヒデも強豪が揃った有馬記念で2着に好走したこと評価したい」という65キロ派。

結局、秋になつての強さを認めつつも64キロにすることで決着がついた。64キロといふのは二冠馬のミホシンザンやサクラスターと同じで、けつして低い評価ではない。

次いでウイニングチケットの評価に移つた。有馬記念と菊花賞の着差からみると、ビワハヤヒデよりかなり下という印象もあるが、ダービーを勝っているのと、ジャパンCで3着に好走しているのを評価して2キロ差の62キロ、という見解がますでた。しかし、「62キロは最近のダービー馬としては最低レベル。ウイニングチケットはジャパンCでも3着に入っているように古馬の一線級、それも世界を相手にその実力を示した。少なくとも上半期に限ればトップだったわけだから、63キロが妥当」という意見が大勢を占め、ビワハヤヒデより一キロ下の63キロに落ち着いた。

続いてナリタタイシンの評価となる。皐月賞を勝ち、ダービーが3着といふことで、大台(60キロ)というものは一致した見解だったが、さらに一キロ上積みするかで意見が交わされた。問題になつたのは秋の成績である。

体調不十分とはいえ菊花賞の凡走はマイナス材料、という意見。これに対し、4歳馬の頂点はダービーであるのだから、ダービーの時点での評価を重視すべき、という反論がでた。また、皐月賞でビワハヤヒデらを一気に差しきつた決め手を高く評価する意見もあった。過去の皐月賞馬で60キロを与えたハクタセイやダイナコスマスよりも上であり、61キロのヤエノムテキと比べても見劣らないといふのは誰もが認めるところ。結局、61キロで決着がついた。

運動説明会により、秋は大きく崩れたりタタイシンだったが、皐月賞、ダービーでみせた末脚が復活することを願わずには

いられない。そして三強による最高のレースを再びみたいものである。

次グループの馬については、ダービーでの着差が示すとおり上位3頭との実力的な開きはかなり感じられる。そこで、三強に続く存在として東のガレオン、西のネーハイシーザー、シクレノンシェリフ、マイシンザンの4頭が俎上に乗せられたが、いずれにしても57キロ以下であることで見解は一致した。関西の3頭は重賞勝ち馬だが、56キロが妥当ではないか、といった意見もでたほどである。ガレオンは重賞を勝っていないが、ダービー

14着の実績と、降着になつたものの内容のよかつた皐月賞を評価して57キロに決まった。また、ネーハイシーザーについても、中日スポーツ賞4歳Sのレコード勝ちと、神戸新聞杯でビワハヤヒデから馬身半差の2着に入ったことが評価されて57キロが与えられた。シクレノンシェリフ、マイシンザンに、菊花賞2着のステージチャンプを加えた3頭は56キロにとどまつた。

以下の馬については別表を参照していただきたい。

(以上32頭)

*は牝馬

'93年フリーハンデ

4歳

64	ビワハヤヒデ
63	ウイニングチケット
61	ナリタタイシン
60	*ベガ
57	ガレオン
56	④ネーハイシーザー
55	*ノースライト
54	*④市地ユキノビジン
53	シクレノンシェリフ
52	ステージチャンプ
51	*ホクトベガ
50	④マイシンザン
49	*スターバレリーナ
48	トヨーリファール
47	*マックスジョリー
46	④ラガーチャンピオン
45	④アンバーライオン
44	*④ケイウーマン
43	④マイネルリマーク
42	マーベラスクラウン
41	*ヤマヒサローレル
40	*アルファキュート
39	④エーピーグランプリ
38	④シルクムーンライト
37	ツジユートビアン
36	ペガサス
35	*ベストダンシング
34	マイヨジョンヌ
33	オースミポイント
32	*デンコウセッカ
31	④ホマレオーカン
30	マルチマックス

牝馬のレベルは前年より落ちるが 二冠を制したベガは別格

牝馬路線は桜花賞とオークスの二冠を制したベガが中心的役割を果たした。全体的なレベルをみると、ニシノフラワー、シンコウラブリイ、タケノベルベット、アドラー・ブル

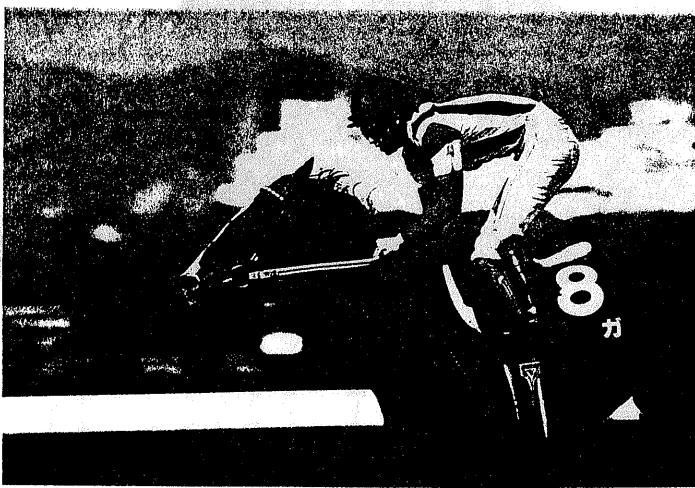
トップハンデで完勝したのが大きく評価され、57キロ。また桜花賞、オーカスとも2着のユキノビジンもノースライトより下には置けないということで、57キロが与えられた。

ホクトベガはエリザベス女王杯が展開的にはまつたといった感もあり、ユキノビジンとは5戦して1勝4敗というのもマイナス材料ということで、56キロに決まった。

スター・バレリーナもローズSの圧勝から56

キロという意見がでた。しかし、エリザベス女王杯の勝ち馬と同等に扱うことはできず、そのエリザベス女王杯で完敗を喫していること、55キロに落ち着いた。

以下の馬については別表を参照していただきたい。



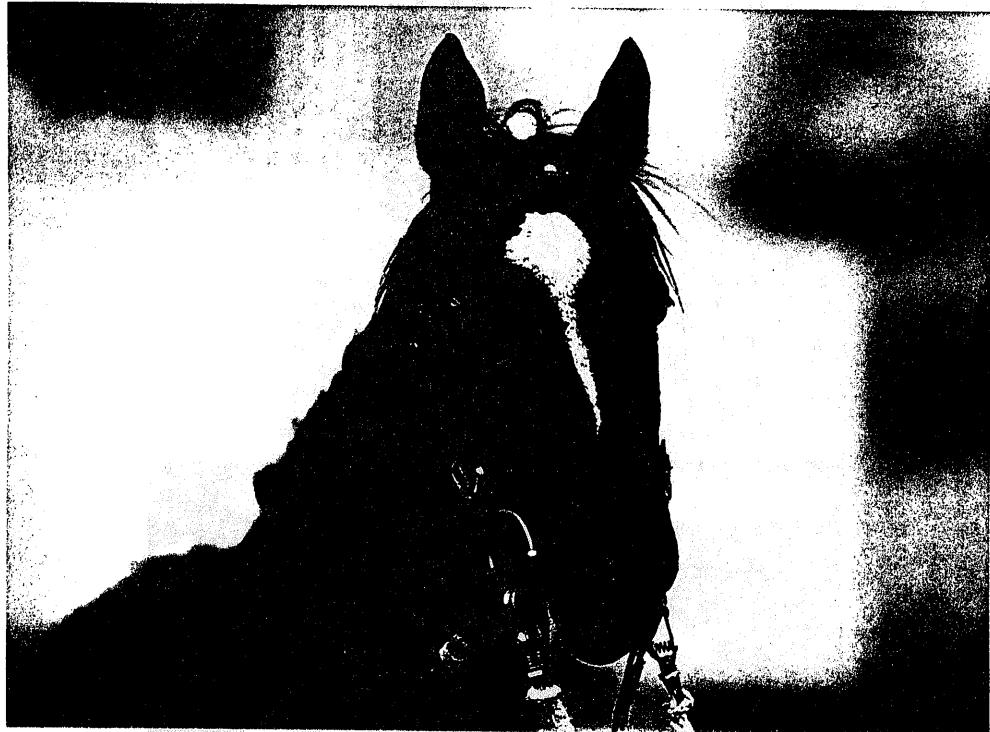
ベガ(桜花賞)

Y. Kubo

'92年に続き、トウカイティオーが高い評価

古馬

The Experimental FREE HANDICAP For Olders of 1993



Y. Kubo

メジロマックイーン、トウカイティオー、ミホノブルボンの対戦が実現しなかつたのは誰もが残念に思うことである。ミホノブルボンは一度も競馬場に姿をみせることはなかつた。また、メジロマックイーンは秋に一戦し引退。トウカイティオーが復帰したのは最後の最後になつてからである。

93年の古馬戦線は一年を通して活躍した馬が少なく、秋になつて力をつけてくる馬も現れなかつた。また、レベルが高いといわれた5歳牝馬陣も夏以降は今一つの成績だつた。そういうふた全体に層の薄い古馬陣にあつて、春の安田記念を制しベストマイラーの座についたヤマニンゼファーが、秋の天皇賞をも制し、唯一のG12勝馬であつた。

まずトウカイティオー、レガシーワールド、メジロマックイーンの3頭の位置付けについての議論となつた。

有馬記念の感動的な勝利が記憶に新しいこともあって、最初にトウカイティオーについて意見が交わされた。前年は有馬記念の惨敗にもかかわらずジャパンCの優勝が高く評価されての65キロだったが、丸一年の休養後に出て走した93年唯一の競走、有馬記念の優勝によって、評価の正しさが改めて証明される形となつた。その有馬記念でジャパンCの勝ち馬レガシーワールドを破っているので、前年同様に65キロを与えられる、という見解で一致した。有馬記念2着のビーハヤヒデ(4歳で64キロ)との比較からも、65キロというのは妥当な評価であろう。

メジロマックイーンについてはトウカイティオーより下に置くというのが一致した見解

'93年フリーハンデ
5歳以上

65	⑧トウカイティオー
64	⑧メジロマックイーン
62	レガシーワールド
61	⑧ヤマニンゼファー
59	ライスシャワー
	※⑧シンコウラブリイ
	⑧メジロバーマー
58	ナイスネイチャ
	マチカネタンホイザ
57	⑧セキティリュウオームービースター
56	※市イクノティクタス
	※⑧エルカーサリバー
	ツインターボ
	⑧ロンシャンボーリ
55	⑧イルトンシンボリ
	ウイッシュドリーム
	オースミロッヂ
	※⑧シスタートウショウ
	※タケノベルベット
	ナリタチカラ
	⑧ホワイトストーン
	ムッシュシェクル
54	アラシ
	⑧イタリアンカラー
	ゴールデンアイ
	⑧サクラセカイオー
	※⑧ヌエボトウショウ
	ループルアクト
53	⑧ハシノケンシロウ
	⑧パリスハーリー
	⑧ローリエアンドレ
52	⑧ネーハイピクトリー
	⑧ヒテノリード
	ブラウンビートル
	マルブツサンキスト
	⑧ユーワビーム
	※ラビットポール
	※⑧ワンモアラブウェイ

(以上39頭)

するかも同時に検討された。

ここでも見解は分かれた。昨年のトウカイティオーや例から、レガシーワールドにも65キロが与えられる、という意見がでた。しかし、ジャパンCの内容はトウカイティオーや上と、いう評価が大勢を占め、昨年のトウカイティオーより一キロ下の64キロに決まった。

再びメジロマツクイーンの位置付けが討議された。ジャパンCと宝塚記念はともにGIながら、出走メンバーからみた格を考慮してレガシーワールドより一キロ下の63キロが妥当、という意見がでた。しかし、常に人気の重圧のなかで勝ってきたこと、ステイヤーながらスピード能力の高さも評価して64キロで決着がついた。

続いてライスシャワーとヤマニンゼファー

の両天皇賞馬の評価に移った。たしかにメジロマックイーンの3連覇を阻んだ春の天皇賞は見事の一言につきる。ステイヤーとしての資質は相当に高い。しかし、秋の一連のレースでも、という意見がでた。たしかにメジロマックイーンの3連覇を阻んだ春の天皇賞は見事の一言につきる。ステイヤーとしての資質は相当に高い。しかし、秋の一連のレースからスピード競馬に対応できない弱点もみせてしまった。ここがメジロマツクイーンと大きく違うところだ。秋の成績がマイナス材料となり、61キロに決定した。

ヤマニンゼファーは93年から国際競走となつた安田記念と、やや相手に恵まれた感もあるが、秋の天皇賞をも制した実績が高く評価され、62キロが与えられた。

世界的にみて長距離レースはすっかり衰退

しており、よりスピードが求められている。

ライスシャワーとヤマニンゼファーの一キロ差は歴史の流れである。

かつて、古馬の最高の栄誉といえど320メートルの天皇賞だった。オールド・ファンにすれば寂しい限りだろう。

59キロには阪神大賞典を勝ち、春の天皇賞で3着に入ったメジロバーマー。58キロには

有馬記念3着のナイスネイチャと、目黒記念でライスシャワーを破ったマチカネタンホイザの2頭がランクされた。

牝馬の最高はシンコウラブリイの59キロ。

毎日王冠の内容からダイナアクトレス級の60キロという意見もでた。しかし、ダイナアクトレスはジャパンC3着が高く評価されたものということで、59キロに落ち着いた。

以下の馬については別表を参照していただきたい。

ヤマニンゼファーは63キロ

93年は安田記念が国際レースとなり、短距

短距離部門を設けてから、初めて1-200

メートルのスペシャリスト、それも超一流の

スプリンター、サクラバクシンオーが現れた

のも特筆すべきことである。これまでマイル

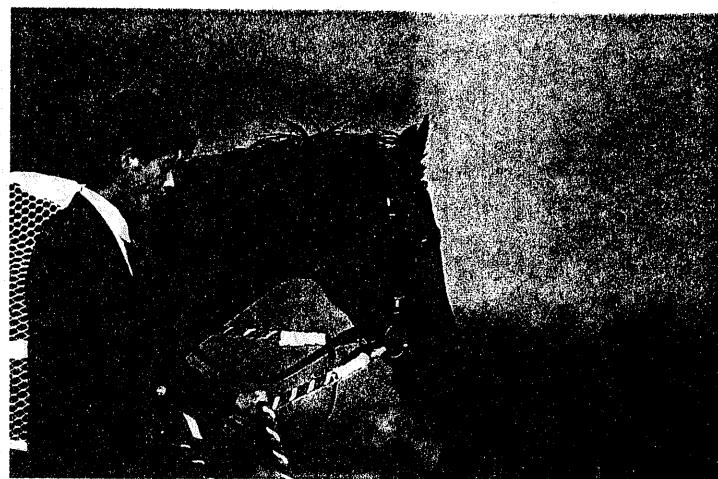
リカ、フランスの2頭だけの出走となり、国

際レースとしてのレベルそのものは低かった

といえる。また、4歳馬の活躍が少なく、こ

二数年と比べると全体的な層の薄さは否めな

い。



Y. Kubo

アーレは、これら2頭を上回ることがあっても、

「パンブームモリーはオグリキャップとマイターズSでも2着に入ったヤマニンゼファーであることは一致した見解である。

では何キロにするか。86年のギャロップダイナ(63キロ)よりは上、89年パンブームモリーや(64キロ)と同等、64キロではどうか、という意見がでた。86年のギャロップダイナは安田記念と東京新聞杯を勝ち、京王杯スプリングC4着。89年のパンブームモリーは安田記念とスワンSを勝ち、マイルチャンピオンシップ2着。戦績だけを見るならば、ヤマニンゼファーは、これら2頭を上回ることがあっても、

意見がいくつかでた。

「パンブームモリーはオグリキャップとマイターズSでも2着に入ったヤマニンゼファーであることは一致した見解である。

64キロというのはレガシーワールドと同等の扱いになる。93年の短距離陣のレベルはそこまで高くなかった」

「マイラーズCは2着ながら完敗といえる内容である。歴代の64キロを与えられた馬はG1以外でも強い競馬をした」

結局、ヤマニンゼファーは前年の61キロから2キロ増の63キロにとどまつた。前年のトップハンデはダイタクヘリオスの62キロだか

ら、63キロというのは低い評価ではない。続いてシンコウラブリイとニシノフラワーの評価に移った。

シンコウラブリイは、ヤマニンゼファーに安田記念と京王杯スプリングCで負けている。ということで、ヤマニンゼファーより2キロ差をつけて61キロ。ニシノフラワーはさらに2キロ下の59キロに決まった。

サクラバクシンオーについては60キロ以上ということを見解は一致。重賞はスプリングCで1勝だけ、そのスプリンターズSのレース自体も昨年あたりに比べ特筆されるほどでもなかつたという意見がでたが、前年の1、2着馬を相手に圧勝したこと高く評価して62キロに決まった。

上位4頭に次ぐのがイクノディクタス。本質的には、短距離馬ではないが、93年のビーストレスが安田記念ということで総合より1トシグリーン、マイスターインガーラ56キロ以下の馬に関しては別表を参照していただきたい。

94年は京王杯スプリングCとスプリンターズSが国際レースとなる。海外のスピード自慢の馬を相手に、サクラバクシンオーをはじめとする日本の快速馬がどういった競馬をみせるか注目したい。

The Experimental FREE HANDICAP For 2-Year Olds of 1993



前年同様、ナリタブライアン、 ヤマニンアビリティに55キロ



ナリタブライアン(朝日杯3歳S)

かかりそうだ。

ヒシアマゾン、フィールドボンバーの外国産馬、メローフルーツ、エクセレンスロビンといった持込馬の活躍が目立つのも93年の特色である。外国産馬や持込馬の頭数は増加の傾向にある。今後、外国産馬や持込馬は日が離せない存在となってきた。

トップハンデは朝日杯3歳Sの勝ち馬ナリタブライアンと京成杯3歳Sの勝ち馬ヤマニアビリティに与えられた。前年のエルウェー・ワイン、ヒワハヤヒテと同じ55キロとなる。ちなみにナリタブライアンはヒワハヤヒテの半弟にあたる。兄弟で2年連続してトップハンデを与えられ、なおかつ同じ年に兄弟揃って3歳部門、4歳部門でそれぞれトップにランクされるのは非常に稀なケースだ。

ナリタブライアンについては、朝日杯3歳オーブン馬の比率は91年が関東1にに対して関西2、92年が関東1に対し関西3だった。93年は関東1に対し関西1・7という比率に変わってきてている。しかし、重賞勝ち鞍になる

と、関東は2勝にとどまつた。トップホース。レベルでの差はまだまだ大きい。美浦にも坂路やウッドチップコースが完成。ハード面では栗東と肩を並べるまでとはなつたが、東西の差が完全に是正されるのはもう少し時間がかかる。

ヤマニンアビリティは京成杯3歳Sでヒシアマゾンを破ったことが高く評価された。そのヒシアマゾンは阪神3歳牝馬Sをレコードタイムで優勝している。前年の勝ち馬スエヒロジョウオーリー上といふのは明らかで、1キロ上の54キロに決まった。

ラジオたんぱ杯3歳Sの勝ち馬ナムラコクオーもタイムと勝ちっぷりのよさから54キロが与えられた。

53キロを与えられたエアダブリン(エリカボディーガード)の重賞勝ち馬と同列に扱われた。

その他の53キロ以下の馬については別表を参照していただきたい。

東西でフリーハンデの対象となつた馬を比較すると、関東馬が40頭、関西馬が50頭。前年は関東馬35頭、関西馬67頭だったことを考えると、関東馬も奮起しつつあるようだ。